

テキストに隠されたジェンダー・バイアス ～中学校の英語テキストを中心に～

伊藤 明美

1. はじめに

ジェンダー意識の形成に多大な影響をおよぼす要因の一つは教育である。我々は最も多感で発達の著しい時期に膨大な時間を学校で過ごし、テキストや教師の言動に隠されたカリキュラムを通じて、日本という社会や文化の中にある基本的な価値観を学んでいくのである。意識するしないにかかわらず、学校は単純なる知識伝達場ではない。本論ではジェンダーをめぐるテキストの隠されたカリキュラム問題を先行研究から明らかにし、その上で中学生向けの英語テキストを分析する。英語は依然、多くの子どもたちにとってはじめて接する科目であり、高いテキストへの依存度がそこに存在するジェンダー観の無批判な受容につながる危険性がある。しかも、異性に対する関心が急速に高まる中学という時期を考えると、テキストが発達途上にある子どもたちのジェンダー意識に与える影響は極めて大きいと推測できるからである。

2. テキストの何が問題とされているのか

はじめに、問題の本質を明確にすることを目的にして、テキスト分析一般にみられるジェンダー・バイアスを先行研究から概観したい。

表1 テキストにおけるジェンダー・バイアス

1. 性別役割分業の強調
2. 女性の不可視性
3. 女らしさ・男らしさの強調
4. 女性の不当描写
5. 差別語の使用

表1に示したように、テキストにおける男女は家庭の内側と外側に分けられる傾向がある。特に女性は家庭的なイメージが強調されるため、仕事については教師・看護師などの「伝統的」職域の中に囲い込まれてきたという。くわえて英語テキストでは、科目固有の問題としてMrs.を通じた家庭内イメージの強調も議論されている。たとえば伊藤（1994）は、成人女性の大半にMrs.を使用し、しかもそのうちの一人に‘House’という姓を与えたテキストを紹介し、文字によるサブリミナル効果を指摘した。19世紀以降のMrs.とMissは、どの女性が「解禁の獲物」であるかを合図するために都合が良かった（スペンダー、1983）とするフェミニスト学者による敬称問題の本質に迫る論点に加え、現代の英語母語社会では離婚率の上昇やダイレクトメールの普及によって、事実上Ms.が広範に使用されていることを考えれば、テキストで使用されるべき女性の敬称はその選択に慎重さが必要であるといえる。

さらに、多くのテキスト分析が女性の不可視性について指摘している。女性は読み物からも歴史からも排除されているというのだ。前者については、特に男性に偏りがちな主人公が問題視されるが、それは子どもたちのジェンダー観やアイデンティティの形成、また、それらに基づく行為の広狭、人生観などと深く関連するからである。このことを示す具体的な研究としては、国語教材を分析した森本（1998）をあげたい。森本は小学6年生にトルストイの『とびこめ』という作品を読ませた上、児童たちの感想文から彼／女たちの主人公（男性）への同化の様子を分析しているが、女子は物語の途中から主人公に同化することをやめ、「母的」存在になって主人公を見つめていると指摘した。主人公への同化を阻まれる女子は、結果として「・・・子どもになりきって想像の世界を駆け回る体験も奪われている（p.42）」のである。

物語の主人公は一般に個人の体験を超えて様々な世界を読者に経験させる。それらは疑似体験には違いないが、こうした経験の積み上げが多様性に富んだ発想と行動を促す可能性がないとはいえない。ヨットで世界一周、

自転車日本横断など、自由で冒険心に富む行為の大半は年齢にかかわらず男性に多い。一般に「茶目っ気」や「やんちゃ」な性質の生涯にわたる保持・表出は男性の専売特許という感もあるが、それを男女ともに許容する現実を考える時、森本の洞察は極めて示唆的である。成人後、活動性における固体差が生じ、それがジェンダーによって特徴づけられる違いだとすれば、その要因の一つとして読書を通じた疑似体験の多寡があげられても不自然なことではない。自らを重ね合わせる対象が少ないということは、女性たちの日常世界を狭めることに等しいと考える。

同様に、テキストがとりあげる歴史的な人物も男性に偏りがちとされ、たとえば佐々木(1994)は、調査した英語テキスト7社中6社までが歴史的な人物として男性を登場させると共に、女性はアンネ・フランクやグランマ・モーゼスなどわずかに4人であったと報告している。武田(2003)はテキストにおけるこうした女性の不可視性をうながすのは、数的に男性に偏った編纂者集団であると述べ、女性の視点が持ち込まれにくいテキスト編纂の構造的問題を指摘した。実際、2005年度現在の中学生向けのテキストの多くは男性によって編纂されており、代表者にいたっては、家庭科を除けば一人もいない⁽¹⁾というのが現状である。

「女らしさ、男らしさ」の問題では、男女の性質を「能動対受動」のように二分化して表現する他、特定の色や装飾品などを固定的に男女に当てはめる傾向が報告されている。活発でスポーツや野外活動に興じる荒削りな態度の男子と、語学が得意でピンクや赤の衣服とリボンを身につけたかわいらしく行儀の良い女子が対比的に描写されることは、多くのテキスト分析に共通である。唯一編纂に多くの女性がかかわる家庭科ですら⁽²⁾、挿絵における女子の赤系、男子のグレー系衣服はとりわけジェンダー・バイアスの程度が高い(中山, 2001)とされている。しかし、何気ない色使いや装飾品が男女一般を示す表象となることは、個人の特性や人間の多様性を覆い隠し、当てはめられた表象に合致しない者の排除につながることもあるため警戒が必要である。女性に関していえば、テキストの女子をピン

ク色の衣服や髪飾りで表現し、ことさらにかわいらしく、また幼く表現することは、女性への公正な判断を鈍らせることにもなる。なぜなら、かわいらしさ、幼さは未熟さのあらわれでもあり、社会が成人に対して求める性質、すなわち能力や成熟とは対極に置かれるものだからである。女性にあてがわれた表象の多くは、極論すれば女性にとって恋愛以外で有利に働くことはなく、また、こうした「女らしさ」への信頼は、事実上、テキストにおける女性の不当な描写へもつながることを見逃すわけにはいかない。バッテリー切れに気がつかずカメラを修理に出す女性（伊藤，1999）は、「かわいらしさ」の裏側にある「負」の女らしさ（この場合は「機械に弱い」）を表現すると共に、現実の多くの女性の姿を反映しているとはいえず、不当な描写である。

くわえて英語では差別語関連の問題として、人間を意味する man や職業名称に与えられる接尾語の man，場合によって女性を劣位に貶める girl や lady などについて報告されている。石川（1998）は、調査した高校生用テキスト36冊中、中立的な職業名称を採用していたのは全体の60%に過ぎなかったとし、佐々木（1998）も woman とすべきところを girl や lady，子孫を son，仲間を brotherhood，文中の one を his で受けることなどを批判する。差別語の使用は、ことばに反映された差別的ジェンダー観を維持し、男女関係を支配・被支配という構図の中で認識させる機能を持っているため、代替語や表現の模索に対する努力が必要であろう。

3. 対象テキストおよび調査項目

中学生向け英語テキストに隠されたジェンダー・バイアスの全体的な傾向を把握することを目的とし、2005年度の採択数で85%を占める上位3点⁽³⁾、計9冊のテキストを対象に、本文および挿絵等に関して以下の項目を調査した。

(1) 対象テキスト（カッコ内は出版社と採択比率）

New Horizon（東京書籍，41%）

Sunshine (開隆堂, 22%)

New Crown (三省堂書店, 22%)

(2) 調査項目

a : 本文および挿絵・写真に登場する男女の数

b : 長文 (70語以上) の主人公

c : 挿絵におけるジェンダー・ステレオタイプな色使い

d : 文章および挿絵の描写にみられるジェンダー・バイアス

4. 結果と考察

(1) 本文および挿絵・写真に登場する男女の数

本文の登場人物については、内容的にまとまりのあるセクション毎に男女それぞれの数を集計した。会話文で複数による同時発話があった場合は、発話した人物すべてを加えたが、発話者が人間ではない場合は、代名詞の性に関わらずそれらを除外した。また、挿絵や写真については性別判断が困難なものについて除外した上で、その総数を男女に分けて集計した。背景化された集団や、後ろ向き、顔の半分以上が切れている人物については、原則的に除外対象とした。

表2 本文の登場人物

女	男
287 (55.30%)	232 (44.70%)

* () 内は全体にしめる男女の割合

表3 挿絵・写真の登場人物

女	男
2060 (50.53%)	2017 (49.47%)

* () 内は全体にしめる男女の割合

登場人物については、本文には女性が多く登場する傾向がみられ ($\chi^2 (1) = 5.83, < .05$), 挿絵や写真では、男女の数に偏りはみられなかった ($\chi^2 (1) = 0.45, p > .10$)。通常、中学英語のテキストは3 - 5人の中

学生が主要な登場人物として設定されるが、テキストによっては、ここでの女子比率を多くしているものもある（女子3，男子2など）。さらに準主要な人物としての教員も女性であることが多く、これらの要因がトータルとしての女性の登場回数に作用したのではないかと思われる。

(2) 長文における中心人物

70語以上の長文は全体で37編あり⁽⁴⁾，そのうち主人公となる人物および人物以外のキャラクターで性別が明確に示されたものは30編であった。中心とされた人物およびキャラクターを男女で分けてみると，男性が22編，女性は8編であり（二項検定： $p < .05$ ），英語テキストにおける長文では男性が中心人物となる傾向が有意に高いことがわかった。

表4 長文の主人公

女	男
8 (26.7%)	22 (73.3%)

* ()内は全体にしめる男女の割合

テーマに関わらず男性は読み物の中心であり，また主要な行為者である。たとえば，突然できた大きな穴をめぐる人々の対応を描くフィクションでは，「穴の買い上げ」「穴に向かって声をかける」などの主だった行為はすべて男性によるものであり，女性はエプロン姿でゴミ袋を持ち，穴のそばに立ちすくむのみである。また，兄弟愛を描く「ジョーイ」は，長さや語彙の面でボリューム感のある読み物だが，女性は一人も登場しない。文中に何度か出てくる少年の‘family’という語彙だけが，女性（母）の存在を匂わせるのみである。また，兄がフットボールの最優秀選手に選ばれて「多くの人々」が参加した祝賀会に「家族そろって」出かける場面を描いた挿絵でも，兄弟とタキシード姿の男性たちだけが描写されている。

(3) 挿絵におけるジェンダー・ステレオタイプな色づかい

今回は、挿絵の男女がどのような色の衣服や持ち物（以後、着衣類とする）を着用しているかを調査した⁽⁵⁾。具体的には、赤、ピンク、オレンジを赤系、青、黒、グレーを青系として、登場人物の着衣類1つ1つの基本色を1点として集計した。衣服では、原則的にデザイン部分の色も1点として加算した。その結果、挿絵で表現される男女は依然「青系」と「赤系」の色使いで区分される傾向があり、特に女性に対する赤、ピンク、オレンジの使用はその傾向が強いことが明らかになった ($\chi^2(1)=340.06$, $p<.01$)。

表5 着衣の色とジェンダー

	赤系	青系
女	804 (75.4%)	523 (38.0%)
男	263 (24.6%)	857 (62.1%)

赤衣着衣類へのこのような執着は現代の日本女性の好みを反映してはいないし、また、第2節で述べたように、表象としての赤、ピンクなどは成人女性に対して不利益に働くことがあるため危険である。ピンクが「女の色」であることは、テキストの男性にピンクを着用させることが稀であったことから伺い知ることができる。唯一ピンクを身につけた男性は、ピンクのハート（これも女性の表象）がちりばめられた黄色いシャツの太った中年であり、コミカルな描き方によって男性ジェンダーは補償されているのである。こうした描写は男性にも息苦しさを与えるが、より重要なことは「女らしい」行為の領域に対する男性の抵抗を助長し、男女間のパワーバランスの不均衡が維持される可能性をもつということであろう。

(4) 文章表現と挿絵に見られるジェンダー・バイアス

最後に文章表現や挿絵の人物行為を通じて描写されるジェンダー観をみていきたい。まずは、いずれのテキストもスポーツや家事行為および職域

における男女の相互乗り入れがあり、ジェンダー視点の強化が図られていることを述べなくてはならない。女子がバスケットやテニスを楽しむ、ソフトボール大会で優秀な成績をおさめる、男子あるいは父親が料理や皿洗いなどをするなどの様子は、練習問題を含め数多く見受けられた。さらに、理数系が得意な女子や医師を目指す女子、国語が得意な男子、保育士を目指す男子の登場は、旧来のジェンダー・ステレオタイプを切り崩す試みとして評価できよう。

しかし、別の場面ではその保育士の夢を持つ同じ少年が、スポーツが苦手であったり、女子を含む中学生集団のうち唯一熱気球をこわがっているように描かれるのは、どういうことだろう。「保育士」「スポーツ苦手」「こわがり」は、かつては女子イメージの代表格であった。旧来の女子に対する視点をそっくり男子に当てはめるこうしたやり方は、ジェンダー理解の視点に変化がなく公正であるとは言いがたい。しかも、この男子は別のユニットで、重さに震えつつ山積みのノートを両手に抱えていながら、女子からの手伝いの申し出を断るなど、「男らしさ」も要求されているのである。男性の女性領域への乗り入れもこうした描写とセットになってしまえば、男性が女性領域に魅力を感じることはないだろう。

さらに、人間や人類を指しての *man* や *mankind* の使用もみられた。今回の調査で見つかったこれらの語彙は実在した人物のスピーチから直接引用したものだったが、*human*, *humankind*, *human being* などで差し替えても発話内容に問題が生じるわけではない。19世紀末に編纂された OED ですら「*man* の総称の意味はすたれた」としている上（フランクとアンシェン, 1995）、*man* や *mankind* の中に女性を含める考え方は、事実上、女性を不可視な存在として組織や社会から排除してきた歴史が明らかにされている以上、それらは明確に差別語である。山田と好井（1991）によれば、差別語は身体レベルや感性レベルの排除の動きと絡み合った重層的な排除のメカニズムを作動させるという。引用文であっても、差別語としての危険性が指摘される語彙や表現は、境界線上のものを含めて、修

正を施すか、少なくとも何らかの説明が必要であると考え。また、人間以外が主人公となった長文では、木の葉やぬいぐるみなどに男性名や男性代名詞が使われていることを指摘しておきたい。スペンダー（1983）が述べるように、女性が可視的になるためには、言語の上でも可視的になる必要があるのではないか。差別的でない英語ユーザーを育てるためにも、テキスト編纂者の差別語あるいは差別的用法へのより高い意識が必要である。

また、寝坊、遅刻、手づかみで食事、つまみ食い、勉強のふりをして自室で漫画本を読むなどの「だらしなさ」「行儀の悪さ」「茶目っ気」等は概して男子が発揮している。こうした表現の繰り返しは、男性によるこれらの行為を社会に認めさせてきたことは前述の通りだが、それは同時に女子のものとされてきた「節度ある」「行儀のよさ」「真面目さ」といった性質の裏返し表現であり、また、あるトリックの中に男女を招き入れる。すなわち、男子はだらしなくても認められ、節度ある行為をすれば褒められるが、女子は節度があって当たり前、だらしなれば「女のくせに」という、2重取りと2重拘束の問題である。文脈上必要とされる以外は、不必要に上記性質を備えた男子を描くことは避けるべきであろう。

5. まとめにかえて

現在の英語テキストは一般に、発展途上にある多くの国々や民族的マイノリティ、障がい者、環境への高い関心を寄せており、いわゆる多文化主義とでもいうべきものがもちこまれた感がある。しかし、多文化主義がめざす多文化社会・世界の実現には、マイノリティ問題という乗り越えるべき大きな課題への誠実な対応が必要であることを付け加えておきたい。ジェンダー視点から述べると、社会的マイノリティとしての女性と差別の現状を見据えることなしには、テキストの多文化主義は脆弱の誇りを免れないのである。女子生徒が活発にスポーツを楽しみ、男子生徒が家事を手伝うなどの描写は、確かにジェンダー平等化への一歩ではあるが、それだけではジェンダー問題の根底にある差別の解消にはつながらない。確認するま

でもなく、テキストは子どもたちにとって選択の余地のない公的で影響力のある教材である。異性や同性に対する公正な理解を促すためにも、また、それぞれが十分に能力を発揮できる社会を目指すためにも、男女の関係性の実態から目を背けることのないテキスト編纂が必要と考える。

注

- (1) および(2) 社団法人教科書協会<<http://www.textbook.or.jp/>>
- (3) 文部科学省教科書課への電子メールでの聞き取りによる。2005年8月10日付の返信は以下の通り。「中学英語 17年度使用需要数（16年9月に調査）1位 東京書籍 41%，2位 三省堂 22%，3位 開隆堂 22%」
- (4) 70語以上で内容に一貫性があるものは、reading materialとしての位置づけがなされていない場合でも「長文」としてカウントした。
- (5) 対象としたテキストが中学生向けであることから髪型や衣服のデザイン、アクセサリなどの表現には幅がなく、そのため今回の調査からは除外した。

引用文献

- 石川有香（1998）「異文化理解と性差別の問題」『言語文化学会論集』第11号，21-29
- 伊藤明美（1999）「英語教育とジェンダー —中学校の教科書を中心に—」『藤女子大学・藤女子短期大学紀要』第36号第1部，61-83
- 佐々木恵里（1994）「はびこる女性差別と『コクサイ人』のゆくえ—中学英語教科書の実態と今後の課題—」女性学第2号，121-129
- スペンダー・デール，れいのるず=秋葉かつえ訳（1987）『ことばは男が支配する』勁草書房
- 武田憲幸（2003）「高等学校の国語教科書にみられるジェンダー問題」『日本ジェンダー研究』第6号，13-26

中山節子, 石川五月, 飯塚和子, 大竹美登利 (2001) 「高等学校家庭科教科書のジェンダー・バイアスに関する分析 (第2報) -被服, 食物, 住居領域について-」『日本家庭科教育学会誌』第44号第2号, 137-145

フランシーヌ・フランク, フランク・アンシェン (1995) 『英語にみる性とことば』 関西大学出版部

山田富秋, 好井裕明 (1991) 『排除と差別のエスノメソドロジー』 新曜社

森本エリ子 (1998) 「ジェンダーを再生産する文学教材—自我形成期の子どもたちが読み取るもの」『女性学』第6号, 117-125